

のんきな患者

梶井基次郎

青空文庫

吉田は肺が悪い。寒かんになって少し寒い日が来たと思つたら、すぐその翌日から高い熱を出してひどい咳せきになってしまった。胸の臓器を全部押し上げて出してしまおうとしているかのような咳をする。四五日経つともうすっかり痩せてしまった。咳もあまりしない。しかしこれは咳が癒なほつたのではなくて、咳をするための腹の筋肉がすっかり疲れ切つてしまつたからで、彼らが咳をするのを肯がえんじなくなつてしまつたかららしい。それにもう一つは心臓がひどく弱つてしまつて、一度咳をしてそれを乱してしまつと、それを再び鎮めるまでに非常に苦しい目を見なければならぬ。つまり咳をしなくなつたというのは、身体が衰弱してはじめてのときのような元気がなくなつてしまつたからで、それが証拠には今度はだんだん呼吸困難の度を増して浅薄な呼吸を数多くしなければならなくなつて来た。

病勢がこんなになるまでの間、吉田はこれを人並みの流行性感冒のように思つて、またしても「明朝はもう少しよくなつてゐるかもしれない」と思つてはその期待に裏切られたり、今日こそは医者いしやを頼たのもうかと思つてはむだに辛抱しんぱうをしたり、いつまでもひどい息切れ

を冒しては便所へ通つたり、そんな本能的な受身なことばかりやっていた。そしてやつと医者を迎えた頃には、もうげっそり頬もこけてしまつて、身動きもできなくなり、二三日のうちにははや褥瘡とこずれのようなものまでができかかつて来るといふ弱り方であつた。ある日はしきりに「こうつと」「こうつと」といふようなことをほとんど一日言っている。かと思つと「不安や」「不安や」と弱々しい声を出して訴えることもある。そういうときはきまつて夜で、どこから来るともしれない不安が吉田の弱り切つた神経を堪たまらなくするのであつた。

吉田はこれまで一度もそんな経験をしたことがなかつたので、そんなときは第一にその不安の原因に思い悩むのだつた。いったいひどく心臓でも弱つて来たんだろうか、それともこんな病気にはあり勝ちな、不安ほどにはないなにかの現象なんだろうか、それとも自分の過敏になつた神経がなにかの苦痛をさういふふうに感じさせるんだろうか。——吉田はほとんど身動きもできない姿勢で身体を鯪しやちこぼ硬張ばらせたままかろうじて胸へ呼吸を送っていた。そして今もし突如この平衡を破るものが現われたら自分はどうなるかしれないといふことを思っていた。だから吉田の頭には地震とか火事とか一生に一度遭あうか二度遭うかというようなものまでが真剣に写っているのだつた。また吉田がこの状態を続けてゆく

というのには絶えない努力感の緊張が必要であつて、もしその綱渡りのような努力になにか不安の影が射せばたちどころに吉田は深い苦痛に陥らざるを得ないのだった。——しかしそんなことはいくら考えても決定的な知識のない吉田にはその解決がつくはずはなかつた。その原因を臆測するにもまたその正否を判断するにも結局当の自分の不安の感じに由るほかはないのだとすると、結局それは何をやっているのかわけのわからないことになるのは当然のことなのだつたが、しかしそんな状態にいる吉田にはそんな諦めがつくはずはなく、いくらでもそれは苦痛を増していくことになるのだった。

第二に吉田を苦しめるのはこの不安には手段があると思ふことだった。それは人に医者へ行つてもらうことと誰かに寝ずの番についてもらふことだった。しかし吉田は誰もみな一日の仕事をすましてそろそろ寝ようとする今頃になつて、半里はんみちもある田舎道を医者へ行つて来てくれとか、六十も越してしまった母親に寝ずについていてくれとか言うことは言い出しにくかつた。またそれを思い切つて頼む段になると、吉田は今のこの自分の状態をどうしてわかりの悪い母親にわからしいか、——それよりも自分がかろうじてそれを言うことができても、じつくりとした母親の平常の態度でそれを考えられたり、またその使いを頼まれた人間がその使いを行き渋しぶつたりするときのことを考えると、實際そ

れは吉田にとって泰山を動かすような空想になってしまふのだった。しかし何故不安になつて来るか——もう一つ精密に言ふと——何故不安が不安になつて来るかというところからだんだん人が寝てしまつて医者へ行つてもらうということもほんとうにできなくなるということや、そして母親も寝てしまつてあととただ自分一人が荒涼とした夜の時間のかへ取り残されるということや、そしてもしその時間の真中でこのえたいの知れない不安の内容が実現するようなことがあればもはや自分はどうすることもできないではないかというようなことを考えるからで——だからこれは目をつぶつて「辛抱するか、頼むか」ということを決める以外それ自身のなかにはなんら解決の手段も含んでいない事柄なのであるが、たとえ吉田は漠然とそれを感じることもできても、身体も心も抜き差しにならない自分の状態であつてみればなおのことその迷妄を捨て切つてしまうこともできず、その結果はあがきのとれない苦痛がますます増大してゆく一方となり、そのはてにはもうその苦しきだけにも堪え切れなくなつて、「こんなに苦しむくらいならいっそのこと言つてしまおう」と最後の決心をするようになるのだが、そのときはもう何故か手も足も出なくなつたような感じで、その傍に坐つている自分の母親がいかにはがゆ齒痒いのんきな存在に見え、「このことそこのに何故これを相手にわからすことができないのだろう」と胸のなかの苦

痛をそのまま掴み出して相手に叩きつけたような癩癩が吉田には起こって来るのだ
 った。

しかし結局はそれも「不安や」「不安や」という弱々しい未練いつぱいの訴えとなつて
 終わつてしまうほかないので、それも考えてみれば未練とは言つてもやはり夜中なにか起
 こつたときには相手をはつと気づかせることの役には立つという切羽つまつた下、心も
 は入つているにはちががなく、そうすることによつてやつと自分一人が寝られないで取り
 残される夜の退引きならぬ辛抱をすることになるのだつた。

吉田は何度「己が気持よく寝られさえすれば」と思ったことかしれなかつた。こんな不
 安も吉田がその夜を睡むる当てさえあればなんの苦痛でもないので、苦しいのはただ自分
 が昼にも夜にも睡眠ということを勘定に入れることができないということだつた。吉田は
 胸のなかがどうにかして和らんで来るまでは否でも応でもいつも身体を鯁硬張らして夜
 昼を押し通していなければならなかつた。そして睡眠は時雨空の薄日のように、その上
 を時どきやつて来ては消えてゆくほとんど自分とは没交渉なものだつた。吉田はいくら一
 日の看護に疲れても寝るときが来ればいつでもやすやすと寝ていく母親がいかに楽しそ
 うにもまた薄情にも見え、しかし結局これが己の今やらなければならぬことなんだと思

い諦めてまたその努力を続けてゆくほかなかった。

そんなある晩のことだった。吉田の病室へ突然猫が這入^{はい}って来た。その猫は平常吉田の寢床へ這入^{はい}って寝るといふ習慣があるので吉田がこんなになってからは喧^{やか}ましく言^いって病室へは入れない工夫をしていたのであるが、その猫がどこから這入^{はい}って来たのかふいにニヤアといういつもの鳴声とともに部屋へ這入^{はい}って来たときには吉田は一時に不安と憤懣^{ふんまん}の念に襲われざるを得なかった。吉田は隣室に寝ている母親を呼ぶことを考えたが、母親はやはり流行性感冒のようなものにかかつて二三日前から寝ているのだった。そのことについては吉田は自分のことも考え、また母親のことも考えて看護婦を呼ぶことを提議したのだったが、母親は「自分さえ辛抱すればやっていける」という吉田にとっては非常に苦痛な考えを固執^{こじつ}していてそれを取り上げなかった。そしてこんな場合になつては吉田はやはり一匹の猫ぐらいでその母親を起こすということはできがたい気がするのだった。吉田はまた猫のことには「こんなことがあるかもしれないと思つてあんなにも神経質に言^いつてあるのに」と思つて自分が神経質になることによつて払^はつた苦痛の犠牲^{ぎせい}が手応えもなくすつぽかされてしまったことに憤懣^{ふんまん}を感じないではいられなかった。しかし今自分は癩^{かんしゃ}を立^たてることによつて少しの得もするのではないと思つと、そのわけのわからない猫

をあまり身動きもできない状態で立ち去らせることのいかにまた根気のいる仕事であるかを思わざるを得なかった。

猫は吉田の枕のところへやって来るといつものように夜着の襟元から寢床のなかへもぐり込もうとした。吉田は猫の鼻が冷たくてその毛皮が戸外の霜で濡れているのをその頬で感じた。すなわち吉田は首を動かしてその夜着の隙間を塞いだ。すると猫は大胆にも枕の上へあがって来てまた別の隙間へ遮二無二首を突つ込もうとした。吉田はそろそろあげて来てあつた片手でその鼻先を押しかえした。このようにして懲罰ちようばつということ以外に何も olmayan 動物を、極度に感情を押し殺したわずかの身体の運動で立ち去らせるといふことは、わけのわからないその相手をほとんど懷疑に陥れることによつて諦めさすといふような切羽せつぽつまつた方法を意味していた。しかしそれがやつとのことで成功したと思うと、方向を変えた猫は今度はのそのそと吉田の寢床の上へあがってそこで丸くなって毛を舐めはじめた。そこへ行けばもう吉田にはどうすることもできない場所である。薄氷を踏むような吉田の呼吸がにわかにならずしりと重くなつた。吉田はいよいよ母親を起こそうかどうかどうしようかという事で抑えていた癩癬かんしゃくを昂たかぶらせはじめた。吉田にとってはそれを辛抱することはできなくないことかもしれないかもしれない。しかしその辛抱をしている間はたとえ寝

たか寝ないかわからないような睡眠ではあったが、その可能性が全然なくなってしまうことを考えなければならなかった。そしてそれをいつまで持ち耐えなければならぬかということはまったく猫次第であり、いつ起きるかしかない母親次第だと思つと、どうしてもそんな馬鹿馬鹿しい辛抱はしきれない気がするのだつた。しかし母親を起こすことを考えると、こんな感情を抑えておそらく何度も呼ばなければならぬだろうという気持だけでも吉田はまったく大儀な氣になつてしまふのだつた。——しばらくして吉田はこの間から自分で起こしたことのなかつた身体をじりじり起こしはじめた。そして床の上へやつと起きかえつたかと思つと、寢床の上に丸くなつて寝ている猫をむんずと掴まえた。吉田の身体はそれだけの運動でもう浪のように不安が揺れはじめた。しかし吉田はもうどうすることもできないので、いきなりそれをその這入つて来た部屋の隅へ「二度と手間のかからないように」叩きつけた。そして自分は寢床の上であぐらをかいてそのあとの恐ろしい呼吸困難に身を委せたのだつた。

しかし吉田のそんな苦しみもだんだん耐えがたいようなものではなくなつて来た。吉田は自分にやつと睡眠らしい睡眠ができるようになり、「今度はだいぶんひどい目に会つた」ということを思うことができるようになると、やつと苦しかつた二週間ほどのことが頭へのぼつて来た。それは思想もなにもないただ荒々しい岩石の重畳する風景だった。しかしそのなかでも最もひどかつた咳の苦しみの最中に、いつも自分の頭へ浮かんで来るわけのわからない言葉があつたことを吉田は思い出した。それは「ヒルカニヤの虎」という言葉だった。それは咳の喉を鳴らす音とも連関れんかんがあり、それを吉田が観念するのは「俺はヒルカニヤの虎だぞ」というようなことを念じるからなのだった。いったいその「ヒルカニヤの虎」というものがどんなものであつたか吉田はいつも咳のすんだあと妙な気持がするのだった。吉田は何かきつとそれは自分の寐ねつく前に読んだ小説かなにかのなかにあつたことにちがいないと思うのだったがそれが思い出せなかつた。また吉田は「自己の残像」というようなものがあるものなんだなというようなことを思つたりした。それは吉田がもうすつかり咳をするのに疲れてしまつて頭を枕へ凭もたらせていると、それでもやはり小さい咳が出て来る、しかし吉田はもうそんなものにいちいち頸くびを固くして応じてはいられないと思つてそれを出るままにさせておくと、どうしてもやはり頭はそのたびに動かざるを得

ない。するとその「自己の残像」というものがいくつもできるのである。

しかしそんなこともみな苦しかった二週間ほどの間の思い出であった。同じ寐られない晩にしても吉田の心にはもうなにかの快樂を求めるとような気持の感じられるような晩もあった。

ある晩は吉田は煙草を眺めていた。床の脇にある火鉢の裾に刻煙草きぎみたばこの袋と煙管きせるとが見えている。それは見えているというよりも、吉田が無理をして見ているので、それを見ているということがなんとも言えない楽しい気持を自分に起こさせていることを吉田は感じていた。そして吉田の寐られないのはその気持のためで、言わばそれはやや楽しすぎる気持なのだった。そして吉田は自分の頬がそのために少しずつ火照ほてったようになって来ているということさえ知っていた。しかし吉田は決してほかを向いて寐ようという気はしなかった。そうするとせつかく自分の感じている春の夜のような気持が一時に病氣病氣した冬のような気持になってしまうのだった。しかし寐られないということも吉田にとつては苦痛であった。吉田はいつか不眠症ということについて、その原因は結局患者が眠ることを欲しないのだという学説があることを人に聞かされていた。吉田はその話を聞いてから自分の睡ねむれないときには何か自分に睡むるのを欲しない気持がありはしないかと思つて

一夜それを検査してみるのだったが、今自分が寐られないということについては検査してみるまでもなく吉田にはそれがわかつていた。しかし自分がその隠れた欲望を実行に移すかどうかという段になると吉田は一も二もなく否定せざるを得ないのだった。煙草を喫うも喫わないも、その道具の手の届くところへ行きつくだけでも、自分の今のこの春の夜のような気持は一時に吹き消されてしまわなければならないということは吉田も知っていた。そしてもしそれを一服喫つたとする場合、この何日間か知らなかつたどんな恐ろしい咳の苦しみが襲つて来るかということも吉田はたいがい察していた。そして何よりもまず、少し自分がその人のせいで苦しい目をしたというような場合すぐに かんしゃく 癩癩を立てておこりつける母親の寐ている隙に、それもその人の忘れて行つた煙草を——と思うとやはり吉田は一も二もなくその欲望を否定せざるを得なかつた。だから吉田は決してその欲望をあらわには意識しようとは思わない。そしていつまでもその方を眺めては寝られない春の夜のような心のときめきを感じているのだった。

ある日は吉田はまた鏡を持つて来させてそれに枯れ枯れとした真冬の庭の風景を反射させては眺めたりした。そんな吉田にはいつも南天の赤い実が眼の覚めるような刺戟で眼についた。また鏡で反射させた風景へ望遠鏡を持つて行って、望遠鏡の効果があるものかど

うかということ、吉田はだいぶんながい間寝床のなかで考えたりした。大丈夫だと吉田は思ったので、望遠鏡を持って来させて鏡を重ねて覗いて見るとやはり大丈夫だった。

ある日は庭の隅に接した村の大きな櫟くぬぎの木へたくさん渡り鳥がやって来ている声がした。「あれはいつたい何やろ」

吉田の母親はそれを見つけて硝子障子のところへ出て行きながら、そんなひとり言のような吉田に聞かすようなことを言うのだったが、癩癩を起すのに慣れ続けた吉田は、「勝手にしろ」というような気持でわざと黙り続けているのだった。しかし吉田がそう思っているというのには吉田にしてみればいい方で、もしこれが気持のよくないときだったら自分のその沈黙が苦しくなって、（いつたいそんなことを聞くような聞かないようなことを言っているのか）と自分でそれを眺めることができると思っているのか）というようなことから始めて、母親が自分のそんな意志を否定すれば、（いくらそんなことを言ってもぼんやり自分がそう思っているということに自分が気がつかないだけの話で、いつもそんなぼんやりしたことを言ったりしたりするから無理にでも自分が鏡と望遠鏡を持ってそれを眺めなければならぬような義務を感じたりして苦しくなるのじゃないか）というふうには母親を攻めたてていくのだったが、吉田は自分の気持がそういう朝でさっぱりしているの、

黙つてその声をきいていることができたのだ。すると母親は吉田がそんなことを考えているということには気がつかずにまたこんなことを言うのだ。

「なんやらヒヨヒヨした鳥やわ」

「そんなら鶇ひよですやろうかい」

吉田は母親がそれを鶇きに極めたがつてそんな形容詞を使うのだということがたいいわかるような気がするのでそんな返事をしたのだ。しばらくすると母親はまた吉田がそんなことを思っているとは気がつかずに、

「なんやら毛がムクムクしているわ」

吉田はもう癩かんしやく癩しやくを起こすよりも母親の思っていることがいかにも滑稽こけになつて来たので、

「そんなら椋鳥むくですやろうかい」

と言つて独ひとりで笑わらいたくなつて来るのだ。

そんなある日吉田は大阪でラジオ屋の店を開いている末の弟の見舞いをうけた。

その弟のいる家というのはその何か月か前まで吉田や吉田の母や弟やの一緒に住んでいた家であつた。そしてそれはその五六年も前吉田の父がその学校へ行かない吉田の末の弟

に何か手に合った商売をさせるために、そして自分達もその息子を仕上げながら老後の生活をしていくために買った小間物店で、吉田の弟はその店の半分を自分の商売にするつもりでラジオ屋に造り変え、小間物屋の方は吉田の母親が見ながらずっと暮らして来たのであった。それは大阪の市が南へ南へ伸びて行こうとして十何年前までは草深い田舎であった土地をどんどん住宅や学校、病院などの地帯にしてしまい、その間へはまた多くはこの地元の百姓であった地主たちの建てた小さな長屋がたくさんできて、野原の名残り^{なご}が年ごとにその影を消していきつつあるというふうの町なのであった。吉田の弟の店のあるところはその間でも比較的早くからできていた通り筋で両側はそんな町らしい、いろいろなものを商^{あきな}う店が立ち並んでいた。

吉田は東京から病気が悪くなつてその家へ帰つて来たのが二年あまり前であった。吉田の帰つて来た翌年吉田の父はその家で死んで、しばらくして吉田の弟も兵隊に行つていたのから帰つて来ていよいよ落ち着いて商売をやつていくことになり嫁をもらった。そしてそれを機会にひとまず吉田も吉田の母も弟も、それまで外で家を持っていた吉田の兄の家の世話になることになり、その兄がそれまで住んでいた町から少し離れた田舎に、病人を住まずに都合のいい離れ家のあるいい家が見つかったのでそこへ引越したのがまだ三ヶ

月ほど前であった。

吉田の弟は病室で母親を相手にしばらく当り触りのない自分の家の話などをしていたがやがて帰って行つた。しばらくしてそれを送って行つた母が部屋へ帰って来て、またしばらくしてのあとで、母は突然、

「あの荒物屋の娘が死んだと」

と言つて吉田に話しかけた。

「ふうむ」

吉田はそう言つたなり弟がその話をこの部屋ではしないで送って行つた母と母屋おもやの方でしたということを考えていたが、やはり弟の眼にはこの自分がそんな話もできない病人に見えたかと思うと、「そうかなあ」というふうにも考えて、

「なんであれもそんな話をあつちの部屋でしたりするんですやろなあ」

というふうなことを言つていたが、

「そりやおまえがびつくりすると思つてさ」

そう言いながら母は自分がそれを言つたことは別に意に介してないらしいので吉田はすぐにも「それじゃあんたは？」と聞きかえしたくなるのだったが、今はそんなことを言う

気にもならず吉田はじつとその娘の死んだということを考えていた。

吉田は以前からその娘が肺が悪くて寝ているということを知っていた。その荒物屋というのは吉田の弟の家から辻を一つ越した二三軒先のくすんだ感じの店だった。吉田はその店にそんな娘が坐っていたことはいくら言われても思い出せなかったが、その家のお婆さんというのはいつも近所へ出歩いているのでよく見て知っていた。吉田はそのお婆さんからはいつも少し人の好過ぎるやや腹立たしい印象をうけていたのであるが、それはそのお婆さんがまたしても変な笑い顔をしながら近所のおかみさんたちとお喋りをしに行つては、弄りものにされている——そんな場面をたびたび見たからだ。しかしそれは吉田の思い過ぎで、それはそのお婆さんが聾で人に手真似をしてもらわないと話を通じず、しかも自分は鼻のつぶれた声で物を言うのでいつそう人に軽蔑的な印象を与えるからで、それは多少人びとには軽蔑されてはいても、おもしろ半分にも手真似で話してくれる人があり、鼻のつぶれた声でもその話を聞いてくれる人があってこそ、そのお婆さんも何の気兼ねもなしに近所仲間の仲間入りができるので、それが飾りもなにもないこうした町の生活の真実なんだということはいろいろなことを知ってみてはじめて吉田にも会得のゆくことなのだった。

そんなふうではじめ吉田にはその娘のことよりもお婆さんのことがその荒物屋についての知識を占めていたのであるが、だんだんその娘のことが自分のことにも関聯して注意されて来たのはだいぶんその娘の容態も悪くなつて来てからであつた。近所の人の話ではその荒物屋の親爺さんというのが非常に吝嗇けちで、その娘を医者にもかけてやらなければ薬も買つてやらないということであつた。そしてただその娘の母親であるさっきのお婆さんだけがその娘の世話をしている、娘は二階のひと間に寝たきり、その親爺さんも息子もそしてまだ来て間のないその息子の嫁も誰もその病人には寄りつかないようになっているということと言つていた。そして吉田はあるときその娘が毎日食後に目高めだかを五匹宛の嘸のんでいるという話をきいたときは「どうしてまたそんなものを」という氣持がしてにわかひとごとにその娘を心にとめるようになったのだが、しかしそれは吉田にとってまだまだ遠い他人事ひとごとの氣持なのであつた。

ところがその後しばらくしてその嫁が吉田の家へ掛取りかけとに来たとき、家の者と話をしているのを吉田がこちらの部屋のなかで聞いていると、その目高めだかを嘸のむようになってから病人が工合がいいと言つていふということや、親爺さんが十日に一度ぐらいそれを野原の方へ取りに行くといふ話などをしてから最後に、

「うちの網はいつでも空あいてますよって、お家の病人さんにもちつと取つて来て飲ましてあげはつたらどうです」

というような話になつて来たので吉田は一時に狼ろうばい狽ばいしてしまった。吉田は何よりも自分の病気がそんなにも大つぴらに話されるほど人々に知られているのかと思うと今更さのよらうに驚かないではいられないのだったが、しかし考えてみれば勿論それは無理のない話で、今更それに驚くというのはやはり自分が平常自分について虫のいい想像をしているんだということを吉田は思い知らなければならなかつたのだ。だが吉田にとつてまだ生々なましかつたのはその目高を自分にも飲ましたらと言われたことだった。あとでそれを家の者が笑つて話したとき、吉田は家の者にもやはりそんな気があるのじやないかと思つて、もうちよつとその魚を大きくしてやる必要があると言つて悪にくまれ口くちを叩たたいたのだが、吉田はそんなものを飲みながらだんだん死期に近づいてゆく娘のことを想像すると堪たまらないような憂鬱な気持になるのだった。そしてその娘のことについてはそれきりで吉田はこちらの田舎の住居の方へ来てしまつたのだ。それがらしばらくして吉田の母が弟の家へ行つて来たときの話に、吉田は突然その娘の母親が死んでしまつたことを聞いた。それはそのお婆さんがある日上がりかまち框かまちから座敷の長火鉢の方へあがつて行きかけたまま脳溢血のういっけつかな

にかで死んでしまったというので非常にあつけない話であつたが、吉田の母親はあのお婆さんに死なれてはあの娘も一遍に気を落としてしまっただろうとそのことばかりを心配した。そしてそのお婆さんが平常あんなに見えていても、その娘を親爺さんには内証で市民病院へ連れて行つたり、また娘が寝たきりになつてからは単に薬ひそかをもらいに行つてやつたりしたことがあるということを、あるときそのお婆さんが愚痴話に吉田の母親をつかまえて話したことがあると言つて、やはり母親は母親だということを言うのだつた。吉田はその話には非常にしみじみとしたものを感じて平常のお婆さんに対する考えもすっかり変わつてしまったのであるが、吉田の母親はまた近所の人の話だと言つて、そのお婆さんの死んだあととは例の親爺さんがお婆さんに代わつて娘の面倒をみてやっていること、それがどんな工合にいつているのか知らないが、その親爺さんが近所へ来ての話に「死んだ婆さんは何一つ役に立たん婆さんやつたが、ようまああの二階のあがり下おりを一日に三十何遍もやつたもんやと思うてそれだけは感心する」と言つていたということを吉田に話して聞かせたのだつた。

そしてそこまでが吉田が最近までに聞いていた娘の消息だつたのだが、吉田はそんなことをみな思い出しながら、その娘の死んでいった淋さびしい気持などを思い遣やつていけるうちに、

不知不識しらずしらずの間にすっかり自分の気持が便りたよない変な気持になってしまっているのを感じた。吉田は自分が明るい病室のなかにい、そこには自分の母親もいながら、何故か自分だけが深いところへ落ち込んでしまつて、そこへは出て行かれないような気持になつてしまつた。「やはりびつくりしました」

それからしばらく経つて吉田はやつと母親にそう言つたのであるが母親は、
「そうやろがな」

かえつて吉田にそれを納得さすような口調でそう言つたなり、別に自分がそれを、言つたことについては何も感じないらしく、またいろいろその娘の話をしながら最後に、
「あの娘はやつぱりあのお婆さんが生きていてやらんことには、——あのお婆さんが死んでからまだ二た月にもならないなあ」と嘆じて見せるのだった。

三

吉田はその娘の話からいろいろなことを思い出していた。第一に吉田が気付くのは吉田がその町からこちらの田舎へ来てまだ何ヶ月にもならないのに、その間に受けとつたその

町の人の誰かの死んだという便りの多いことだった。吉田の母は月に一度か二度そこへ行つて来るたびに必ずそんな話を持つて帰った。そしてそれはたいいてい肺病で死んだ人の話なのだった。そしてその話をきいているとそれらの人達の病氣にかかつて死んでいったまでの期間は非常に短かった。ある学校の先生の娘は半年ほどの間に死んでしまつて今はまたその息子が寝ついてしまつていた。通り筋の毛糸雜貨屋の主人はこの間まで店へ据えた毛糸の織機で一日中毛糸を織つていたが、急に死んでしまつて、家族がすぐ店を畳んで国へ歸つてしまつたそのあとはじきカフエーになつてしまつた。――

そして吉田は自分は今はこんな田舎にいてたまにそんなことをきくから、いかにもそれを顯著に感ずるが、自分がいた二年間という間もやはりそれと同じように、そんな話が実に数知れず起こつては消えていたんだということを思わざるを得ないのだった。

吉田は二年ほど前病氣が悪くなつて東京の学生生活の延長からその町へ歸つて来たのであるが、吉田にとつてはそれはほとんどはじめての意識して世間というものを見る生活だった。しかしそうはいつでも吉田は、いつも家の中に引つ込んでいて、そんな知識というものはない家めだかの者の口を通じて吉田にはいつて来るのだったが、吉田はさっきの荒物屋の娘の目高めだかのように自分にすすめられた肺病の薬というものを通じて見ても、そういう

世間がこの病氣と戦っている戦の暗黒さを知ることができるとは思わなかった。

最初それはまだ吉田が学生だった頃、この家へ休暇に帰って来たときのことだった。帰って来て そうそう 々吉田は自分の母親から人間の脳味噌のうみその黒焼きを飲んでみないかと言われて非常に嫌な気持ちになったことがあった。吉田は母親がそれをおすすめでもしない一種変な口調で言い出したとき、いったいそれが本気なのかどうなのか、何度も母親の顔を見返すほど妙な気持ちになった。それは吉田が自分の母親がこれまでめつたにそんなことを言う人間ではなかったことを信じていたからで、その母親が今そんなことを言い出しているかと思うとなんとなく妙な頼りないような気持ちになって来るのだった。そして母親がそれをすすめた人間からすでに少しばかりそれをもらって持っているのだということを知ることができたとき吉田はまったく嫌な気持ちになってしまった。

母親の話によるとそれは青物を売りに来る女があつて、その女といろいろ話をして居るうちにその肺病の特効薬の話とその女がはじめたというのだった。その女には肺病の弟があつてそれが死んでしまった。そしてそれを村の焼場で焼いたとき、寺の和尚おしょうさんがついでいて、

「人間の脳味噌の黒焼きはこの病氣の薬だから、あなたも人助けだからこの黒焼きを持っ

ていて、もしこの病気で悪い人に会ったら頒^わけてあげなさい」

そう言つて自分でそれを取り出してくれたというのであった。吉田はその話のなかから、もうなんの手当もできずに死んでしまったその女の弟、それを葬ろうとして焼場に立つてゐる姉、そして和尚と言つてもなんだか頼りない男がそんなことを言つて焼け残つた骨をつついている焼場の情景を思い浮かべることができたのだつたが、その女がその言葉を信じてほかのものではない自分の弟の脳味噌の黒焼きをいつまでも身近に持つていて、そしてそれをこの病気で悪い人に会えばくれてやろうという気持には、何かしら堪^たえがたいものを吉田は感じないではいられないのだつた。そしてそんなものをもらつてしまつて、たいてい自分が嘔^のまないのはわかっているのに、そのあとをいつたいたいどうするつもりなんだと、吉田は母親のしたことが取り返しのつかないやなことと思われるのだつたが、傍にきいていた吉田の末の弟も

「お母さん、もう今度からそんなこと言うのん嫌^{いや}でつせ」

と言つたのでなんだか事件が滑稽になつて来て、それはそのままに覺^{けり}がついてしまったのだつた。

この町へ歸つて来てしばらくしてから吉田はまた首縊^くりの繩を「まあ馬鹿なことやと思

うて」嘸のんでみないかと言われた。それをすすめた人間は大和やまとで塗師ぬしやをしている男でその縄をどうして手に入れたかという話を吉田にして聞かせた。

それはその町に一人の鰥夫やもめの肺病患者があつて、その男は病気が重つたままほとんど手当をする人もなく、一軒の荒あばら家に捨て置かれてあつたのであるが、とうとう最近になつて首を縊くつて死んでしまった。するとそんな男にでもいろんな借金があつて、死んだとなるといろんな債権者がやつて来たのであるが、その男に家を貸していた大家がそんな人間を集めてその場でその男の持つていたものを競売にして後仕末をつけることになつた。ところがその品物のなかで最も高い値が出たのはその男が首を縊つた縄で、それが一寸二寸というふうにして買い手がついて、大家はその金でその男の簡単な葬式をしてやったばかりでなく自分のところの滞とどつていた家賃もみな取つてしまったという話であつた。

吉田はそんな話を聞くにつけても、そういう迷信を信じる人間の無智に馬鹿馬鹿しさを感じないわけにいかなくなつたけれども、考えてみれば人間の無智というのはみな程度の差で、そう思つて馬鹿馬鹿しさの感じを取り除いてしまえば、あとに残るのはそれらの人間の感じている肺病に対する手段の絶望と、病人達のなんとしてでも自分のよくなりつつあるという暗示を得たいという二つの事柄なのであつた。

また吉田はその前の年母親が重い病氣にかかって入院したとき一緒にその病院へついて行っていたことがあった。そのとき吉田がその病舎の食堂で、何心なく食事した後ぼんやりと窓に映る風景を眺めていると、いきなりその眼の前へ顔を近付けて、非常に押し殺した力強い声で、

「心臓へ来ましたか？」

と耳打ちをした女があった。はつとして吉田がその女の顔を見ると、それはその病舎の患者の付添いに雇われている付添婦の一人で、勿論そんな付添婦の顔触れにも毎日のように変化はあったが、その女はその頃露悪的な冗談を言つては食堂へ集まって来る他の付添婦たちを牛耳ぎゆうじっていた中婆さんなのだった。

吉田はそう言われて何のことかわからずにはばらく相手の顔を見ていたが、すぐに「あなるほど」と気のついたことがあった。それは自分がその庭の方を眺めはじめた前に、自分が咳をしたということなのだった。そしてその女は自分が咳をしてから庭の方を向いたのを勘違いして、てつきりこれは「心臓へ来た」と思ってしまったのだと吉田は悟さとることができた。そして咳がふいに心臓の動悸を高めることがあるのは吉田も自分の経験で知っていた。それで納得のいった吉田ははじめてそうではない旨を返事すると、その女はそ

の返事には委細かまわずに、

「その病気に利くええ薬を教えただげまひよか」

と、また脅かすように力強い声でじつと吉田の顔を覗き込んだのだった。吉田は一にも二にも自分が「その病氣」に見込まれているのが不愉快ではあったが、

「いったいどんな薬です？」

と素直に聞き返してみることにした。するとその女はまたこんなことを言つて吉田を閉口させてしまふのだった。

「それは今ここで教えてもこの病院ではできまへんで」

そしてそんな物々しい駄目だめをおしながらその女の話した薬というのは、素焼すやきの土瓶どびんへ鼠の仔を捕つて来て入れてそれを黒焼きにしたもので、それをいくらか宛かずつごく少ない分量を飲んでいると、「一匹食わんうちに」癒なおるというのであった。そしてその「一匹食わんうちに」という表現でまたその婆さんは可怕こわい顔をして吉田を睨にらんで見せるのだった。吉田はそれですつかりその婆さんに牛耳られてしまったのであるが、その女の自分の咳に敏感であったことや、そんな薬のことなどを思い合わせてみると、吉田はその女は付添婦という商売がらではあるが、きつとその女の近い肉親にその病氣のものを持っていたのに

ちがいないということ想像することができるのであった。そして吉田が病院へ来て以来最もしみじみした印象をうけていたものはこの付添婦という寂しい女達の群れむのことであった、それらの人達はみな単なる生活の必要というだけではなしに、夫に死に別れたとか年が寄つて養い手がないとか、どこかにそうした人生の不幸を烙らくいん印いんされている人達であることを吉田は観察していたのであるが、あるいはこの女もそうした肉親をその病気で、なくすることによつて、今こんなにして付添婦などをやっているのではあるまいかということ、吉田はそのときふと感じたのだった。

吉田は病氣のためにたまにこうした機会にしか直接世間に触れることがなかったのであるが、そしてその触れた世間というのはみな吉田が肺病患者だということを見破つて近付いて来た世間なのであるが、病院にいる一ひと月ほどの間にまた別なことに打ぶつかった。

それはある日吉田が病院の近くの市場へ病人の買物に出かけたときのことだった。吉田がその市場で用事を足して帰つて来ると往來に一人の女が立っていて、その女がまじまじと吉田の顔を見ながら近付いて来て、

「もしもし、あなた失礼ですが……」

と吉田に呼びかけたのだった。吉田は何事かと思つて、

「？」

とその女を見返したのであるが、そのとき吉田の感じていたことはたぶんこの女は人違いでもしているのだろうかというところで、そういう往来のよくある出来事がたいい好意的な印象で物分かれになるように、このときも吉田はどちらかと言えば好意的な気持を用意しながらその女の言うことを待ったのだった。

「ひよつとしてあなたは肺がお悪いのじゃありませんか」

いきなりそう言われたときには吉田は少なからず驚いた。しかし吉田にとって別にそれは珍しいことではなかったし、無躰ぶしつけなことを聞く人間もあるものだとは思いながらも、その女の一心に吉田の顔を見つめるなんとなく知性を欠いた顔付きから、その言葉の次にまだ何か人生の大事件でも飛び出すのではないかという気持もあつて、

「ええ、悪いことは悪いですが、何か……」

と言うと、その女はいきなりとめどもなく次のようなことを言い出すのだった。それはその病気は医者や薬ではだめなこと、やはり信心をしなければとうてい助かるものではないこと、そして自分も配つれあい偶あひがあつたがとうとうその病気で死んでしまつて、その後自分も同じように悪かつたのであるが信心をはじめてそれでとうとう助かることができたこと、

だからあなたもぜひ信心をして、その病氣を癒せ——ということを縷々として述べたのであった。その間吉田は自然その話よりも話をする女の顔の方に深い注意を向けないではいられなかつたのであるが、その女にはそういう吉田の顔が非常に難解に映るのかさまざまに吉田の氣を測ってはしかも非常に執拗にその話を続けるのであった。そして吉田はその話が次のように変わっていったときなるほどこれだなと思つたのであるが、その女は自分が天理教の教會を持つているということと、そこでいろんな話をしたり祈禱をしたりするからぜひやって来てくれということとを、帯の間から名刺とも言えない所番地をゴム版で刷つたみすぼらしい紙片を取り出しながら、吉田にすすめはじめのだった。ちようどそのとき一台の自動車がかかかってブーブーと警笛を鳴らした。吉田は早くからそれに気がついていて、早くこの女もこの話を切り上げたらいいことと思つて道傍へ寄りかけたのであるが、女は自動車の警笛などは全然注意には入らぬらしく、かえつて自分に注意の薄らいで来た吉田の顔色に躍起になりながらその話を続けるので、自動車はどうとう往来で立往生をしなければならなくなつてしまつた。吉田はその話相手に捕まつてゐるのが自分なので体裁の悪さに途方に暮れながら、その女を促して道の片脇へ寄せたのであったが、女はその間も他へ注意をそらさず、さつきの「教會へぜひ来てくれ」という話を急にまた、

「自分は今からそこへ帰るのだからぜひ一緒に来てくれ」という話に進めかかっていた。そして吉田が自分に用事のあることを言つてそれを断わると、では吉田の住んでいる町をどこだと訊いて来るのだつた。吉田はそれに対して「だいぶ南の方だ」と曖昧あいまいに言つて、それを相手に教える意志のないことをその女にわからそうとしたのであるが、するとその女はすかさず「南の方のどこ、××町の方かそれとも〇〇町の方か」というふうのつびに退引きのならぬように聞いて来るので、吉田は自分のところの町名、それからその何丁目というようなことまで、だんだんに言つていかなければならなくなつた。吉田はそんな女にちつとも嘘を言う気持はなかつたので、そこまで自分の住所を打ち明かして来たのだつたが、

「ほ、その二丁目の？ 何番地？」

といよいよその最後まで同じ調子で追求して来たのを聞くと、吉田はにわかしやくにぐつと癩しかくにさわつてしまった。それは吉田が「そこまで言つてしまつてはまたどんな五月蠅うるさいことになるかもしれない」ということを急に自覚したのにもよるが、それと同時にそこまで退の引きつびのならぬように追求して来る執拗な女の態度が急に重苦しい圧迫を吉田に感じさせたからだつた。そして吉田はうっかりカツとなつてしまつて、

「もうそれ以上は言わん」

と屹ぎつと相手を睨にらんだのだった。女は急にあつけにとられた顔をしていたが、吉田が慌あわててまた色を収めるのを見ると、それではぜひ近々教会へ来てくれと言つて、さつき吉田がやつてきた市場の方へ歩いて行つた。吉田は、とにかく女の言うことはみな聞いたあとで温おとな和なしく断ことわつてやろうと思つていた自分が、思わず知らず最後まで追いつめられて、急に慌あわててカツとなつたのに自分ながら半分は可笑おかしさを感じないではいられなかったが、まだ日の光の新しい午前の往来で、自分がいかにも病人らしい悪い顔がんぼう貌ぼうをして歩いてゐるといふことを思い知らされたあげく、あんな重苦しい目をしたかと思つたと半分は腹立たしくなりながら、病室へ帰るとそうそう々々、

「そんなに悪い顔色かなあ」

と、いきなり鏡を取り出して顔を見ながら寝台の上の母にその顛てんまつ末まつを訴えたのだつた。すると吉田の母親は、

「なんのおまえばかりかいな」

と言つて自分も市営の公設市場へ行く道で何度もそんな目に会つたことを話したので、吉田はやつとそのわけがわかつて来はじめた。それはそんな教会が信者を作るのに躍やつき起きになつていて、毎朝そんな女が市場とか病院とか人のたくさん寄つて行く場所の近くの道で

網を張っていて、顔色の悪いような人物を物色しては吉田にやったのと同じような手段でなんとかして教会へ引つ張って行こうとしているのだということだった。吉田はなあんだという気がしたと同時に自分らの思っているよりは遙かに現実的なそして一生懸命な世の中というものを感じたのだった。

吉田は平常よく思い出すある統計の数字があった。それは肺結核で死んだ人間の百分率で、その統計によると肺結核で死んだ人間百人についてそのうちの九十人以上は極貧者、上流階級の人間はそのうちの一人にはまだ足りないという統計であった。勿論これは単に「肺結核によつて死んだ人間」の統計で肺結核に対する極貧者の死亡率や上流階級の者の死亡率というようなものを意味していないので、また極貧者と言ったり上流階級と言ったりしているのも、それがどのくらいの程度までを指しているのかはわからないのであるが、しかしそれは吉田に次のようなことを想像せしめるには充分であった。

つまりそれは、今非常に多くの肺結核患者が死に急ぎつつある。そしてそのなかで人間の望み得る最も行き届いた手当をうけている人間は百人に一人もないくらいで、そのうち

の九十何人かはほとんど薬らしい薬ものまずに死に急いでいるということであつた。

吉田はこれまでこの統計からは単にそういうようなことを抽象して、それを自分の経験したそういうことにあてはめて考えていたのであるが、荒物屋の娘の死んだことを考え、また自分のこの何週間かの間うけた苦しみを考えるとき、漠然とまたこういうことを考えないではいられなかつた。それはその統計のなかの九十何人という人間を考えてみれば、そのなかには女もあれば男もあり子供もあれば年としより寄もいるにちがいない。そして自分の不如意や病気の苦しみに力強く堪えてゆくことのできる人間もあれば、そのいずれにも堪えることのできない人間もずいぶん多いにちがいない。しかし病気というものは決して学校の行軍のように弱いそれに堪えることのできない人間をその行軍から除外してくれるものではなく、最後の死のゴールへ行くまではどんな豪傑でも弱虫でもみんな同列にならばして嫌いやおう応なしに引き摺ずつてゆく——ということであつた。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「中央公論」

1932（昭和7）年1月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.jutyama

校正：二宮知美

1999年6月2日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

のんきな患者

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>